知財創造実践甲子園活動が知財情報産業界にもたらす意義について

もの作り活動や研究活動に取り組む者の習性として、出来上がった成果物が最先端、最良と思うバイアスがかかるらしく、大学や研究機関等の研究者の多くは、論文や発明届等をまとめる際、周囲を見回しての成果物の立ち位置を確認する行動をあまり取らない傾向にあると言われている。

そういった研究者たちは、特許取得を考え始める段になって、先行技術の有無を知財担当者に指摘されて、大慌てで先行文献を調べ始める。あるいは、スタートアップを申請しようとすると、特許取得が必要条件と聞かされて、従来の技術の中に同じものが無いか否か、第三者特許に抵触していないか等、成果物が出来上がってから、遅まきながら、調査に取りかかるのが現状である。

本来ならば、モノ造りの進行過程で調査も並行して行っていれば、モノ造りに効率よくフィードバックできるはずである。しかし、学校教育等では、モノ造り教育と情報調査教育等が、分かれて行われており、生徒・学生達にとっては、それらを頭の中で融合できにくい状況となっている。

モノ造り教育では、「学習」という、先人達が残した成果を繰り返し真似し身に着けさせることも重要であるが、それらは自由に真似し活用できるものとは限らないことも指導する必要がある。学生達には、既存の技術には了承を取らなくてはならない場合があることへの意識を学ぶチャンスであり、模倣（学習）の先にある新たな創造の世界に挑戦するきっかけとなるのである。

知財創造実践甲子園は、学生達にこれらを総合的に体験させることができる取り組みである。高校生という早い時期に先行技術調査の重要性を体感・体験することは、将来、研究・開発現場や企業のモノ造り現場で活躍するためのスプリングボードとなるはずである。

なにより、知財創造実践甲子園活動は、若い学生達に、特許情報を身近に感じ、活用を実践してもらうには、うってつけの授業である。山口大学知財教育拠点活動の枠を超えて、いろいろなチャンネルを媒体としての今後ますますの展開が期待される。